「学都仙台」—— その"学都"観をさぐる—— (その1)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中川, 正人 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24022

「学都仙台」――その〝学都〟観をさぐる――（その一）

中川正人

はじめに

高木博志氏は、『京都の歴史を歩く』（岩波新書　二〇一六年）のなかで、「学都とは、多分にお国自慢にもとづく、都市の自己表象である。ナショナリズムが高揚する日清・日露戦争をへた二〇世紀に入って、郷土愛の喧伝や地方利益の導入があたりまえとなり各地の都市が表明したものであった」と、述べている。(注1)

高木氏が、「学都」を「都市の自己表象」と捉えることは理解できるが、①「多分にお国自慢にもとづく」とされる前提条件や、②「日清・日露戦争をへた二〇世紀に入って、各地の都市が表明したものであった」と言明されることは納得できない。これらの二点について、「学都」を呼称するといわれる各都市に関する研究で、具体的な資料に基づく検証はなされているのだろうか。筆者の率直な疑問であり、本稿を執筆する動機のひとつである。

「学都」や「学都仙台」の呼称（別称・名称）は、後述するように、昭和前期以降、仙台市が「近代都市・仙台の未来像」構築を具現化する計画を作成し、市民に重点施策を伝えるさいに、『市公報』などに明記されてきた。たとえば、昨年度も、仙台市は、『仙台市政だより（二〇一六年四月）』で、「政策重点化方針二〇二〇」の重点政策の一つに「学びを多彩な活力につなげる都市づくり」をあげ、「学都の推進と教育環境の整備」として「学都仙台コンソーシアムの運営支援などにより、地域や市民に大学等の知的資源を還元する学都を目指します」と報じている。

しかし、「学都」や「学都仙台」の呼称（以下、呼称を略す場合もある）を、現在、仙台市民がどのように認識しているかについては、具体的に把握できていない。二〇〇一年（平成一三）度に仙台都市総合研究機構で実施した仙台市民意識調査（仙台市に居住する二十歳以上の男女一万人を無作為抽出、有効回収率五六％）によれば、仙台の都市イメージについて、六つの都市像から二つ選択する方法で質問したところ、「杜の都（五六・五％）」「東北の中枢都市（五二・〇％）」は、五割を超えたが、その他の項目は、「歴史・文化に恵まれた都市（一三・八％）」「一〇〇万都市（一二・二％）」「学都（一〇・六パーセント）」「環境都市（七・六パーセント）」で、一

割程度と低い。「学都」が、仙台の都市イメージとして広く市民に認知されていない状況を確認できる。年代が高いほど「学都」の認知度が高く、二〇代では五・一％であるが、七〇代以上では一八・五％であった。[注2] このような市民の認知状況は、その後も、大きな変化を生じていないと推測できる。

また、仙台市役所自体が、「学都」をどのように捉えているのか、市民向け「公報」資料からは確認できない。仙台市は、「学都」の呼称を不明確な定義づけのまま使用し、発信を続けている。

いかなる都市を「学都」と見なすのか、その現代的意義の分析と確認は当然必要であるが、「学都」の歴史的特性を把握することも欠かせない。明治末期以降、「学都」は「杜の都」の呼称（以下、呼称を略す場合もある）とともに、近代都市・仙台を論じるキーワードとして用いられてきたことは確かである。しかし、「学都」の呼称を使用した具体的な資料を時系列に並べて目を通してみると、異なった意味づけによって、表記・論述されている。

現在、「学都」を都市の特性として研究対象となっているのは、仙台・金沢・松本・岡山・広島・福岡・熊本などであるが、これらの都市の自治体史（市史）で、「学都」をテーマにした節や項目を設けて論述しているのは、仙台のみである。その他の都市の自治体史では、「学都である」との記述はあるが、「その都市で、いつごろから学都の呼称が誕生したのか」「学都の呼称がいつ、どのような意味づけで使用されていたのか、意味づけに変化はなかったのか」「それを裏づける具体的な資料を確認できるのか」などについては、管見するところ筆者には把握できない。また、「学都」の呼称に関する市民（地域住民）の意識についても、明らかではない。

いかなる都市を「学都」と見なすのか、本稿を論述する前提として確認して置かねばならない。しかしながら、「学都」に関する先行研究では、自明のように使用されている「学都」の定義づけの検討や、具体的な資料を明示しての検証は、極めて少ないと感じられる。因みに、漢和辞典や国語辞典などに「学都」が掲載されるのは、一九五五年（昭和三〇）発行の『広辞苑』（新村出編　岩波書店）が最初であろう。「学都」は「学校が多い都市」と記述されている。

谷村宗生氏は、「学都」を高等中学校（のちの高等学校）に代表される官立の高等教育機関が設置されている「学問および教育の中核都市」と定義づけられ、[注3] 現在、この定義づけを前提にして地方都市「学都」の研究が取り組まれている。

「学都」の定義づけに関しては、先行研究者が大事にしてきた「基本概念（抽象）の吟味は、できるだけ資料（具体）の側に身を置いて繰り返し丁寧に行う」という姿勢を継承したい。「学都」「学都仙台」の呼称の検証も、その「具体」の把握に努めたい。

仙台は、「学都」や「学都仙台」の呼称を使用することによって、数ある地方都市の中で、ある種特別のイメージで、全国的にも、仙台市民のなかでも、語られ記録されてきた都市であったと考える。現在、地方都市のなかで「学都」として捉えられている金沢・松本・岡山・広島・福岡・熊本について、仙台との同異性を具体的に検証する必要がある。

本稿では、これらの私見に基づき、「学都」「学都仙台」の呼称を、「仙台の地で、いつごろ、どのような人が、どのような場面で、どのような意味づけのもとに、どのように論じてきたのかということ」、いいかえれば、どのような「学都」観をもって論述してきたのかを、具体的な資料に基づいてさぐってみる。

以下、「学都」や「学都仙台」の呼称の誕生、「学都」「学都仙台」の概念（認識内容）が形成されていく要因と経緯、その歴史的背景について、左記の予定目次にそって、二回に分け考察する。

①、先行研究について
②、「学都」「学都仙台」の呼称の具体的な使用事例
③、仙台以外の都市に関する「学都」の呼称事例
④、第二高等学校生徒の「学都たらしめよ」論
⑤、仙台市長早川智寛の「教育地仙台」論
⑥、「学都」「教育地」の意味づけ
⑦、大正期の「学都」論
「学都」の呼称の普及
具体的な「学都」像の模索
⑧、昭和前期（戦前・戦中）の「学都」論
「東北の学都仙台」から「学都仙台」へ
「教育都市」「大学園」の呼称
仙台市長渋谷徳三郎と仙台教育研究所

一、先行研究について

「杜の都」「杜の都仙台」は、「学都」「学都仙台」とともに仙台の呼称で、数ある都市についての呼称のなかで、現在も全国的に認知されている。

「杜の都」の呼称に関しては、小林清治氏が一九五八年（昭和三三）に『仙臺郷土研究　第十八巻第一号』[注4]で「〝杜の都〟の形成と終末」と題して論じている。小林氏は、「杜の都」の呼称を「都市としての仙台の個性」として捉え、呼称の由来と実体の解明に取り組まれた。そのなかで、①戊辰戦争ののち、「白河以北一山百文」すなわち東北地方の「沈滞」の反映としての「東北の首都・仙台」の意識が存在していること、②具体的には、その「東北の首都・仙台」が、産業都市すなわち近代都市的性格を帯びることなく政治都市・軍都・学都たる性格にとどまり、近代都市化の大きく遅れた典型的な存在であるとの認識が地域社会にあること、③「杜の都」の呼称の誕生は、仙台の近代都市化への課題を模索する時期と重なっていること、④「杜の都」の呼称は、仙台の市街の現象面をあらわすにとどまらず、都市仙台の本質にまで及ぶ、きわめて深い含蓄をもっていること、これらをふまえて具体的な実体の検証に取り組む意義を提起された。小林氏が提示した観点は、「学都」「学都仙台」の呼称の由来と実体を明らかにする取り組みでも、継承すべきであると考える。

「杜の都」「杜の都仙台」に関しては、その後、和泉浩氏、武田篤志氏、菊池慶子氏などの研究[注5]によって、呼称の由来と実体について明らかにされてきた。三氏とも、ほぼ同時期に確認できる「学都」「学都仙台」の呼称との関わりについても論述している。菊池慶子氏は、①「杜の都」は地元仙台から生まれた名称で、仙台を形象する最もふさわしい呼称であること、②学びの場にふさわしい都市として「杜の都」と「学都」の呼称を一体的に浸透させていったことを、指摘している。

また、「軍都」「軍都仙台」の呼称に関しても、一戸富士雄氏、佐藤雅也氏、中武敏彦氏などの研究によって、呼称の由来と実体について明らかにされている。[注6]

「学都」「学都仙台」の呼称に関する研究が始まる契機となったのは、一九九三年（平成五）に『市史せんだい　第三号』（特集座談会「学都仙台を考える」[注7]）が、「学都」「学都仙台」に関する具体的な検討の必要性を提起したことである。そこでは、①「学都仙台」の呼称がいつ生まれたのか、②仙台市民がいつ頃から「学都」を意識するようになったのか、③「学都仙台」と第二高等学校誕生のかかわり、④戊辰戦争後の仙台市民のいわゆる「東北意識」の存在とのかかわり、⑤仙台が教育に熱心であるということだけでは、「学都」の呼称は生まれないのではないか、⑥明治末期に、「学都」の呼称を使わずに、「教育地」の呼称を使って仙台を論じた仙台市長早川智寛を大村栄氏が紹介し、「学都仙台」を解明する一つの手がかりであると述べ、[注8]早川智寛が「学都仙台」にかけた夢や、昭和前期の仙台市長渋谷徳三郎と彼のもとで仙台市教育研究所所長を務めた及川平治が求め続けた教育理想を、新しい視点から考えてみることの重要性を指摘、⑦さらに、キリスト系私立学校など高等教育機関の存在や、東北帝国大学が教員や市民向けに公開講座を実施していたこと、⑧一般に、大学とか専門学校というような高等教育機関だけを考えて、仙台を「学都」と理解しがちであるが、初等教育の基礎があってはじめて「学都」ができあがることなど、「学都」「学都仙台」の実体の解明への具体的な課題が提起された。

「学都」「学都仙台」に関する本格的な研究が始まるのは、「講座仙台学２００５―学都。その過去・現在・未来―」が開催され、在仙の大学研究者がそれぞれ異なった視点から、＜仙台の都市としての個性、魅力である「学都」＞を多彩な学問分野で追究し、その研究成果を市民講座で公開した頃からである。

この講座の報告では、とくに難波信雄氏と菊池慶子氏の研究に学ぶところが多かった。[注9]難波信雄氏は、「学都」を考える視点として、①仙台が東北の高等教育機関の中枢都市であったこと（代表的な指標として第二高等学校、東北帝国大学の創立）、②仙台が自ら生み出していった具体的な学習の場の広がりからどんな特徴がみえるか（私塾、公私立の教育機関―学校・幼稚園・育児院・夜学・その他の支援組織、児童文化運動、社会教育など）、③都市化の動きとどんな関わりがあるのか、などを提示し、「学都仙台」の歴史的実体の検証の必要性を強調された。③の指摘は、小林清治氏の観点と重なるものである。

菊池慶子氏は、〝「学都」としての都市形成〟の視点から、①「学都」の名称の登場とひろがり、②「学都」の環境としての「杜の都」について報告された。

最近では、仙台市歴史民俗資料館「学都仙台と杜の都」講座で報告された一戸富士雄氏と菊池慶子氏の研究が興味深い。(注10) 一戸富士雄氏は、「学都」の定義づけがあいまいなままに、論述されていることを指摘し、各種の国語辞典の定義づけを分析・類型化され、「学都」を「学校、特に大学を中心として成立している都市」とする定義づけに注目され、さらに、現在、「学都の中核が大学であると規定する」論述が目につくと指摘された。そのうえで、「学都仙台」論の歴史を、①旧制第二高等学校生徒の新入生や仙台市民への檄文、②地元メディアによる「学都仙台」論の登場と市民への喚起、③東北帝大の総合化による市民の「学都仙台」意識の定着、の三つの視点から論じられ、従来の「学都仙台」に関する認識の通俗性(非実証的な情緒論)を指摘し、丁寧に「学都」論を検証する必要性を強調された。そのうえで、「帝国大学としての東北帝大が、学都仙台の中核的存在の根本性格をもっていたこと」を柱に、その歴史的な実像について論じられた。

菊池慶子氏は、「杜の都仙台」を論じるなかで、「学都」の呼称が誕生する経緯と、「学都仙台」の「学都」の実像についてふれられ、『仙台』(小倉博著　大正一三)の記述「学都　学校の種類に於て、逐年盛況を呈し、現今に於ては最高学府たる帝国大学を始め、教育機関の具ってゐること全国稀に見る所であろう」を引用し、多様な教育機関(大学・高等専門学校・中等学校・専修学校・小学校・幼稚園)が充実していることと捉え、とくに私塾・私立学校の存在と幅広い女子教育機関(小学校・ミッション系女学校・公立女学校・東北帝大女子学生・裁縫学校など)の存在を注視された。

以下、先行研究をふまえて、明治末期・大正期・昭和前期の仙台で、「学都」「学都仙台」の呼称がどのように誕生し、どのように論述され、認識されてきたのか、具体的な資料の読み取りを通してさぐってみる。

二、「学都」「学都仙台」の呼称の具体的な使用事例

第二高等学校生徒(以下、二高生・二高学生とも記す)が学友会雑誌『尚志会雑誌　六七号』(一九〇五年　明治三八年)に寄稿した論文「学都たらしめよ(新来の諸君を迎えて)」は、「学都」の呼称に関する基本的な資料で、現時点で、仙台における「学都」の呼称の初見と確認されている。(注11)

この論文に関して、東北大学史料館は、つぎのように述べている(傍線は筆者)。

◆二高生が中心となって市内の他の学生や市民を感化し、仙台を「最善最美なる日本唯一の学都」たらしめるべきだとの主張である。明治後期の社会変化の中、高等学校や専門学校に学ぶ学生が増加する一方で「学生堕落論」が世評を賑わし、また青年の煩悶や神経衰弱などが社会問題ともなっていた。明治三八年

には市内の下宿等に寄留する各学校の学生を保護監督するため仙台市教育会が「学生保護部」を設けた。「学都たらしめよ」では、この学生保護部設置について「学生の恥辱此上なし」と述べ、このような措置を不要とするためにも、二高の「校風」をもって仙台市内の学生や市民・兵士を感化し、「学都」化しなければならないと説いている。「学都」という語は、仙台という都市の気風を自ら担わんとする二高生のプライドやエリート意識が強く込められた言葉であった。そして「学都」の語はその後も『尚志会雑誌』に繰り返し登場し、やがて新聞紙上等でも、「教育地」の語と入れ替わるように、「学都」の語が使われるようになっていく。

この論文についての検討は、次稿でテーマ「第二高等学校生徒の「学都たらしめよ」論」を設けて取り組むが、「学都」の捉え方（傍線部分）に焦点をあてた資料の読み取りを試みる。

㈠、文献資料や新聞記事に記載された「学都」の呼称

先行研究では、仙台の特性（個性）の一つとされる「学都」の呼称は、時間軸にそってみると、「教育地」（明治三〇年）→「学府」→「学都」（明治三八年）という経緯で誕生したと報告されている。[注12] しかし、その誕生の由来、変化の要因、呼称の意味づけについては、明らかにされておらず、「杜の都」「軍都」の由来や定義づけへの取り組みに比べ、精査されていない。

つぎに掲載する表1・2・3は、「学都」の呼称が初見された明治末期から昭和前期までの期間、「学都」にかかわる呼称がどのように使用されてきたのか、その経緯や特徴、「学都」の概念（認識内容）などをさぐる糸口を得るために作成したものである。表1で、「学都」以外に「杜の都」「軍都」「東北の仙台」の項目の設定した意図は、中武敏彦氏と和泉浩氏の取り組みに学んでいる。[注13] なお、公開されている『河北新報』記事は大正初期部分が欠けており、資料収集はできていない。

表1・2・3から、「学都」「学都仙台」に関して、確認できる特徴をあげてみる。

①時間軸にそって「学都」の欄を追ってみると、呼称が変化するいくつかの転換期があることに気づく。第二高等学校生徒による「学都」の呼称の発信以降も、「教育地」の呼称が大正初期まで使用されていること、とくに、教育雑誌に掲載される教育者の論文が、その期間、一貫して「教育地」を記していることに注目したい。その背景には、後述する仙台市長早川智寛に代表される「教育地仙台」論が存在していたと考える。

②「学府」の呼称も確認できる。「学府」の本来の意は、「学術社会の首脳、すなわち、それに関係するすべてのもののあつまる処」（『漢和大字典』明治三六年　三省堂書店）や「学問のあつまるところ。学校」（『改修言泉』大正一〇年　大倉書店）であろう。両者の意で使用している事例が多い。しかし、「学府」の「府」は、「人家多く物資のあつまる処、都邑」（『漢和大字典』明治三六年

【表１】 文献資料掲載の「学都・森の都・軍都」関係の呼称

発行年	文 献 名（編著者）	学　都 （学府・教育地）	森（杜）の都	軍　都	東北の仙台
明治38 （1905）	尚志会雑誌（67号） （第二高等学校尚志会）	学都	×	兵都	仙都
明治40	尚志会雑誌（74号） 尚志会雑誌（76号） 松島志を李（荒川偉三郎） 仙松塩遊覧案内（今井清見）	日本唯一の学都 日本一の学都・教育の都 × ×	× × 深林の都会 山河秀麗の仙台市	× × × ×	東北の大都仙台 × 東北唯一の都会 白河関外の一大都府
明治41	大東評論（１巻１号）（大東社） 大東評論（１巻５号）	教育地 教育地	× ×	× ×	× ×
明治42	仙台松島塩釜遊覧の栞（荒川偉三郎） 仙台新報（30号・38号） （紳士之友改題　仙台新報社）	× 学府としての仙台 全国有数の学府 吾邦の学府 東北唯一の学府	森の都 ×	× ×	東北一の都会 東北の首都 東北以北の大都会
明治43	仙台新報（42・44・45号）	本県は教育地 仙台は其の学府 東北の学府	森の都 林の市	×	東北の首都
明治44	仙台新報（54・56・57号） 仙台案内（大内励三）	教育地たる仙台市 東北の学園	× 森の都	× ×	東北の首都 東北の重鎮 東北の大都会
大正２ （1913）	松島大観（山下重民） 仙台案内（阿部兼雄）	教育地 全国有数の学府	森の都 ×	× ×	東北一の大市 東北第一の都会
大正５	仙台繁昌記（富田広重）	日本の学府	森の都・杜の都	×	東北一の都会
大正８	高等学校受験秘訣（菊池朝彦・出口競）	学校市	×	×	×
大正13	仙台松島塩釜大観（加藤勝寿） 仙台（小倉博・仙台市教育会）	学府・学都 学都	× 森の都	× ×	東北における一大都会 東北第一の都市
昭和３ （1928）	仙台遊覧の枝折（小山源蔵）	学都	森の都	×	東北一の大都会
昭和７	宮城県郷土誌 （菊地勝之助・初等教育学会） 右尚会雑誌（46号） （宮城県師範学校右尚会）	東北地方の学都 教育都市 東日本における 文教の府	森の都 ×	軍隊の町 ×	東北第一の都市 ×
昭和８	宮城県案内（鈴木清兵衛） 仙台市民読本（五橋高等小学校） 仙台郷土誌（全）（仙台市教育会） 我が仙台（仙台市教育会） 仙台市及市民（松本栄旦）	東北の学都 学都仙台 学都 学都・教育都市 精神の都会	森の都仙台市 × × 森の都 ×	× 軍都仙台 × 軍事の中心都市 ×	東北文化の中心 日本有数の大都会 東北第一の都市 東北第一の都会 東北の冠たる都市
昭和10	仙台市民読本（全）（仙台市教育会）	学都仙台	森の都	軍都仙台	東北第一の大都市
昭和11	仙台案内（二階堂節治）	学都	×	×	東北第一の都会
昭和12	宮城県郷土読本（日之巻・月之巻） （宮城県教育会） 躍進宮城の教育界（第２輯）（土橋信一） 尚志（167号）（第二高等学校尚志会）	学都仙台 学都仙台 教育都市	森の都・杜の都 × ×	軍事中心の都市 × ×	東京以北における最大都市 × ×
昭和13 （1938）	仙台郷土誌要覧 （仙台陸軍幼年学校生徒集会所）	我国有数の学都	森ノ都	軍都仙台	東北第一ノ大都会

【表２】「教育雑誌」掲載の「仙台」に関する呼称（ゴシック体は筆者）

明治38（1905）	宮城県教育会雑誌（104号）	教育地
明治40（1907）	宮城県教育会雑誌（127号）	教育地
明治42（1909）	帝国教育（328号） 宮城県教育会雑誌（160号）	教育地 教育地
明治44（1911）	宮城県教育会雑誌（172号）	教育地
大正３（1914）	帝国教育（379号）	教育地としての仙台 東北の教育地
大正６（1917）	宮城教育（237号） （宮城県教育会雑誌改題） 宮城教育（242号）	**東北の学都** **森の都或は学都**
大正７（1918）	宮城教育（246号）	学府
大正８（1919）	宮城教育（258号）	**森の都をして今やわが国の学都**
大正９（1920）	宮城教育（270号） 宮城教育（273号） 宮城教育（275号）	天下の学府 **東北学都** **学都として誇る森の都**
大正10（1921）	帝国教育（465号）	**学都**

【表３】『河北新報』掲載の「教育地・学府・学都」に関する見出し
（一部に記事内容も含む、ゴシック体は筆者）

明治36年（1903）	５月14日	**早川市長の学生取締諭告（東北の学府、教育する大市）**
明治38年	3月8･9日	**教育地としての仙台**（上・下）
	11月21日	有望なる仙台市（教育地）
明治39年	２月15日	堕落の仙台（教育地）
	７月16日	教育地としての仙台
	10月17日	教育地としての仙台（牧野文部大臣の談）
	10月22日	教育地と商工地（東北唯一の教育地）
	11月１日	絶好の教育地たる仙台（全国唯一の教育地）
	11月21日	**仙台学生に告ぐ（最高学府の地、全国有数の教育地）**
	12月24日	教育地としての責任
明治40年	１月21日	教育地の下宿屋（教育地、好個の学府）
	３月28日	退任せんとする早川市長（二）（教育地）
	８月25日	軍事教育と仙台（教育地）

明治40年	8月28日	教育地としての仙台
	8月30日	教育地としての仙台
	9月3日	教育地としての仙台（教育地の条件）
	9月18日	**学府としての設備** **（歴史的東北の学府、東北における唯一の教育地）**
	12月20日	**学都**と学会（**学都たる仙台市民**）
明治41年	2月22日	東京人の見たる仙台（教育地）
	10月6日	教育地と競馬問題
	11月6日	当市の清韓留学生（教育地）
明治44年	10月25・26・27日	河北文壇　**学都仙台** **（学問の都市、森の都！学都！、天下の学都、学校によりて作られたる仙台）**
明治45年	1月21日	教育地当面の問題
	3月12日	仙台市の教育観（教育地としての仙台市）
大正8年（1919）	1月9日	高商問題に就て　仙台商業会議所会頭談（東北の学府）
	6月23日	仙台市経営策　森正隆県知事（**学都**） 仙台市経営策　藤崎三郎(助)（**東北の学都**、東北の学府）
	9月24日	**東北の学都仙台**にも女子大学を設けよ
	11月26日	宮城県を去るに臨みて　兒崎為槌談（**天下の学都**）
大正9年	3月1日	予の大仙台観　東北学院長シュネーダー（教育地）
	7月31日	児童夏期体育の中止は**東北学都**の不面目
	9月7日	女子大学計画　県教育課長（仙台市を**学都**として充実）
大正10年	3月2日	恐入った**教育都市**　教員増給費削減とは何事
	5月23日	**学都**の渇望を充たす夜間大学実現
	6月16日	二つの文化機関で漸く**学都**らしい仙台
	10月15日	天下に愧を曝す市教育会（**東北唯一の教育都市**）
	10月27日	市教育界革新の運動（**教育都市**）
大正15年	5月4日	申し分ない**学都**　利用しない実業家　仙台人の覚醒が必要
	10月6日	**学都仙台**の地を親しく参観して　ハーバート大学教授談
昭和2年（1927）	4月1日	**学都**として必要な学生の寄宿舎
昭和3年	4月4日	大仙台となるまで三百年の沿革（**学都の称**）
昭和4年	11月20日	**学都仙台**の面目維持　生れる校外組合
昭和6年	7月22日	鳥が多い杜の都仙台　市民の二十分の一は官吏 **（杜の都仙台は学都といはれてゐる）**
昭和8年（1933）	3月22日	近代都市としての仙台市の再吟味 （尚絅女学校高等科生徒特集頁）（**学生の町、学都**）

三省堂書店）の意、つまり都会や市街地の意味も有しており、「学府」と「学都」を同義語として使用していたと読み取れる資料も存在する。具体的な使用例をみると、意味上の「親和性」を認めざるをえない。そうした実相も見落とせない。

③一九〇七年（明治四〇）以降、『河北新報』記事で「学都」の呼称を使用していることが確認されている。しかし、前述の理由により『河北新報』記事では大正初期について確認できない。

菊池慶子氏は、『河北新報』（明治四〇年一二月二〇日）掲載記事「学都と学会」に、教員養成所が算学者関孝和の二百祭を開催することについて「学都たる市民の為すべき務」の記述があり、『尚志会雑誌』の初見以降で「学都」の呼称を確認できる資料であると報告している。しかし、この記事は仙台を「此の教育地」とも記し、「学都」の意味づけはない。(注14)

その後、一九一一年（明治四四）一〇月の『河北新報』に連載された「河北文壇　学都仙台」が、「学都仙台」を「学問の都市」「学校によりて作られたる仙台」と記述している。(注15)「学都」の意味づけを記しているが、明治三〇年代初めからの「学生の町仙台」論や、同紙の一九〇六年（明治三九）一一月二一日付記事「仙台学生に告ぐ」で仙台を「最高学府の地」「全国有数の教育地」と捉えている視点からの大きな変化はみられないと考える。

④メディアの地元紙『河北新報』が報じる「教育地」や「学都」を冠する仙台の記事は、地域住民に大きな影響を与えたことは間違いない。しかし、『河北新報』が発信した「学都」の呼称は、表1・2が示すように、教育関係者を含めた人々に、間を置かずに普及した痕跡はなく、「教育地」の呼称が、一九一四年（大正三）頃まで使用され続けている。

⑤大正後期から昭和初期には、「学都」について一定の共通認識が定着し、「学都」のイメージが次第に形成されていったと推測できる。その一方で、「学府」や「教育地」の使用頻度は低くなっている。

一九一九年（大正八）の『河北新報』掲載の「仙台市経営策について」で、宮城県知事森正隆が「学都」、藤崎三郎（藤崎三郎助か）が「東北の学都」を用いて意見を述べている。また、仙台を「学都」と紹介している『仙台松島塩釜大観』（大正一三年）は観光案内書、『仙台遊覧の枝折』（昭和三年）は東北産業博覧会開催のおりに、市民向けに出版されたもので、当時の「学都」の呼称の広がりの実態を窺わせる。

⑥一九三三年（昭和八）以降は、仙台市教育会や教育現場の教師が編纂・発行した「郷土教育読本」（『仙台市民読本』『我が仙台』など）を使用した郷土教育の実践によって、新たに「学都仙台」の呼称が普及していった様子が把握できる。「学都仙台」の呼称が普及・使用されるなかで、「教育都市」の呼称も使われることに注目したい。

⑦明治末期から大正初期にかけての「教育地」と「学都」の呼称の使用では、言説の差違のぶつかり合いが展開し、その過程で、それぞれが自己の認識を転換したり、互いに共通・共感できるもの

を見出す努力を続け、都市仙台（地域社会）や教育への関心が高まっていき、「学都」の概念（認識内容・定義づけ）も特徴づけられていったと考える。

「学都」の呼称が、ある時点で確認できたからといって、「学都」に関する共通の認識が生まれているとは断定できない。「学都」は、初めから共通理念を包括しておらず、「杜の都」や「軍都」とは異なる特殊性をもった概念として、時間をかけ形成されていったと考える。一戸富士雄氏が指摘しているように、辞典類がこの紛らわしい意味づけの多様性を立証している。(注16)

⑧大正期以降の「学都」の概念は、第二高等学校生徒の「学都」論と仙台市長早川智寛に代表される「教育地」論を内蔵していたと考える。「学都」と「教育地」の呼称は、それぞれ発信された当初の一義性を失っている可能性がある。

⑨「学都」の呼称と併記されるかたちで、「東北の大都仙台」などの呼称を確認できる。仙台の特性（個性）として「東北第一の都会（都市）」を強調することには、「近代東北」の意識が集約されている。その根底には、外からの「東北に対する後身地なるイメージ」を、そのまま受け入れず、現実を踏まえた東北の一地域・都市仙台の独自性の主張、すなわち、地域に対する地域住民の「自負」の意識が存在していたと考える。

⑩そのほか、『高等学校受験秘訣』（大正八年）が、当時、「学都」として対外的にも発信されていた仙台を、旧制高等学校を有する他の都市（東京・京都を含む）と異なった特性を持つ都市「学校市」として、紹介していることにも留意したい。(注17)

なお、これらの特徴に関連した課題については、次稿で取り組みたい。

㈡、『東京朝日新聞』掲載記事にみる「学都」の呼称

前記の表1・2・3に掲載した資料のほかに、「学都」の呼称で仙台について論述した一九〇九年（明治四二）の『東京朝日新聞』記事が存在する。地域住民や地元ジャーナリスト以外の人物の「仙台」観や「学都」観が窺われ、興味深い（ゴシック体・傍線は筆者）。

◆「東北の東半面（八）無冠人　仙台の将来」（『東京朝日新聞』明治四二年八月一四日）

つくづくと**仙台の将来を思ふ**、教育の盛んなる土地なれば**教育地**とするこそ然るべきか、（中略）何れの市にもある師範、中学高等および之と同一程度位のものは除いて此地の特殊学校を数ふれば、いの一番が東北大学理科大学次が第二高等学校又其次が医学専門学校、外には高等工業学校もあれば地方幼年学校もあり、基督教主義の東北学院も立派なもの、仙台に福島の商業なく若松の工業なくともそれ以上の繁華にて**東北一の都市**たるを得る次第は、人を要する一万の師団と控訴院其他の高等官衙と以上列記の学校とがある為、軍人官吏、教員及び生徒の多人数が仙台に居住するの関係より来る、若し師団と官衙と学校とを仙台より引き去らば今日の繁華は半以上を減じて左迄の都市にもあらぬ事となるべし、左れば仙台の繁華は仙台自らが富

の力を有する為にはあらで、軍隊、官衙及び学校あるが為なり、即ち自働的繁華にはあらで他動的繁華たるなり、（中略）其発達は前編に述べたる如く城郭的防衛に起因するものなれば、今日の世となりては都市としての価値余り大ならぬなり、即ち仙台は今正に都市の基礎を何とか変更せねばならぬ運命中にあるものにて、ここ一つ仙台人の考究を要せねばなるまじ、然るに**仙台は教育地として比類稀なりと称せられ居る事なれば、そを幸ひと従来の城郭的都市より脱して其基礎を学術上に置くの学都とするこそ然るべき思ふなり、学都と云ふ事は日本には例なき様なれど**欧米にはよく之れあり、英国のケンブリッチやオックスフォールドなどそれなり、**仙台は現時でさへ東北の学都たる観あれば今一層規模を大にし位置を高めて日本の学都とする誠によろしからずや、（中略）仙台を学都とするの資格は十分なるべし**、帝都の東京に近い事が其一なり、気候が健康に適し悪疫の流行他の地方より少なきが其二なり、山も海も近く食料其他の生活材料に豊富なるが其三なり、生活の低廉なる楽天地たるが其四なり、学校多きゆゑ学校と学校との間に連絡が付きて統一の容易なるが其五なり、若し**学都**にては面白からずとあれば産業地とするがよろしかるべく（後略）

記事内容の要点は、①仙台は「教育地として比類稀なりと称せられている」こと、②「学都と云ふ事は日本に例なき様」ではあるが、③仙台は「現時でさへ東北の学都たる観あれば、今一層規模を大にし位置を高めて日本の学都とする誠に宜しからずや、仙台を学都とするの資格は十分なるべし」としている点である。厳密にいえば「学都」はいまだ日本には存在しないこと、しかし、仙台は現時点でも「東北の学都」の観があり、「日本の学都」を目指すべきであるとの提言である。

仙台の「学都」の呼称は、当時、他の都市では類似例のない、都市仙台の独自のネーミングとして注目されていたことを証左する資料である可能性を秘めている。もちろん、無冠人が、地元紙『河北新報』の「学都」に関する報道記事に基づいて論述していることは推測できる。

三、仙台以外の都市に関する「学都」の呼称事例

高木博志氏は、京都を「学都」と基本的に捉えられている。(注18) しかし、「京都を学都と呼称していた」（いつごろから、どのような場で、どのような人たちによって、どのような形で）ことを明示する具体的な資料に基づく論述は、管見するところでは確認できない。高木氏は、地方都市の呼称である「学都」と同義語として「学都京都」を使われているのだろうか。

現在、筆者が具体的な資料として把握しているのは、以下にあげる大正期以降の地方都市を含めた事例のみである。（ゴシック体・傍線は筆者）

㈠、大正期の『東京朝日新聞』報道記事に見る「学都」の呼称

◆「北海道記（十）無冠人　農科大学」（大正二年一〇月二二日）

札幌は北海道政治の中心なれば政治都市たるは云ふにや及ぶ。左れども□に政治都市たるのみならず又学都とも称し得るべし。（中略）北海道は新開地として拘束なく腐敗なく、生々として人ならば青年時代、木ならば豊かなる日光に浴する喬木にて新鋭は其特色なり、自由は其特色なり。世俗に拘らぬ身を斯る外界の誘惑なき天地に置きて孜々蛍雪の業に励むは正に其所を得たらざるや。左らば**札幌を学都と称する**の結論は自然に来るべき順序なるべし。（後略）

◆「**理想的の大学都市**を作るべく帝大生運動」（大正一二年一〇月一日）

焼出された東京帝大の在京学生約二百名は一日午後六時を期して焼跡の構内第二学生控室に学生大会を開くことになった。（中略）『学術の研究と精神陶冶に復興出来る新天地を欲す』といふにある。（中略）本郷の地帯は全く雑閙の巷と化し思索と研究の場所として不適当である許かりでなく身心鍛錬の運動場もないから『帝都復興の力が燃えているこの際、大学も熱閙を避ける校外に土地を選んで学生の生活を安定する大寄宿舎をも建設し』然うして**理想の大学都市**を作りたいといふのである。（後略）

◆「鉄葶　帝大移転」（大正一二年一〇月一一日）

学都建設の為めの帝大移転の運動は、学術の蘊奥を究め、人格陶冶を主目的とすといふ帝国大学にふさわしい運動だと云へる。（後略）

◆「**学都**の夢　一高等学校生寄」（大正一二年一〇月一一日）

此の際、**学都**だけは是非移転させたいものと思ふ。学問の中心が、俗団紛々たる都会のまツただ中に在る如きはどう見ても感心せぬ。（中略）日本には今迄**本当の学都学校あっての町**は一つもない。一ツ位はあっても良からうじゃないか。いや、之は夢だ、今の当局にはとても出来はすまい。やはり我々はあの塵の中の大学に学ぶべきなのか。

一九一三年（大正二）の「北海道記」の記者は、一九〇九年（明治四二）に「仙台の将来」と題して「仙台は東北の学都の観あり」と論述した無冠人である。「札幌学都」に関する記事と、一九二三年（大正一二）の東京帝国大学生と高等学校生の「帝都移転」論に共通するのは、「学都」の条件として「新開地として拘束なく腐敗なく」「外界の誘惑なき天地」「学術の研究と精神陶冶が可能な天地」であることをあげ、「学問の中心が、俗団紛々たる都会のマツただ中にあるべきでない」と主張していることである。また、東京帝大生の主張は、「学都」を「大学都市」として捉え、「東京が学都である」ことを前提としたものではない。大震災を機に「学都とはいえない東京」に存在する帝国大学を移転して、新「大学都市」すなわち「学都」を建設すべきであるとの意見で

ある。高等学校生の寄稿文は、「日本には本当の学都（学校あっての町）」は存在しないと断言している。

(二)、現在、「学都」都市として論じられている地方都市の呼称

仙台以外の地方都市で「学都」の呼称を確認できる資料は少ない。『日本地理体系』[注19]（一九三〇・三一年　昭和五・六年　改造社）には、つぎのように記載されている。（ゴシック体は筆者）

仙台―「仙台は**東北の学都**、大学以下高工、二高その他各種学校が多く」「二高は**学都仙台**の草分け」（「森の都」の記載もある）

広島―「文理大学、高師、高工高校などの所在地として**学都**たる特色をも有している」（「水の都」「橋の都」の記載もある」）

金沢―「官衙、軍隊、**学校の町**」（「北陸地方第一の都会」の記載もある）

福岡―「箱崎町は**大学街**としての特色が著しくなりつつある。九州帝国大学と称する総合大学が成立し京都以西に於ける学府となった」

岡山―「医科大学第六高等学校の創立は**学問の府**としての発展を物語る」

この資料から「学都」の呼称を確認できるのは、仙台と広島のみである。

筆者が各地方都市の先行研究を十分に掌握していないので、昭和前期の実態であると断定はできない。たとえば、金沢では、『北国毎日新聞』（昭和二〇年八月九日）が「変貌の金沢　学都の誇り両校も疎開」の見出しで、「敵米の残虐な盲爆に自己防衛を講ずるため、学都の誇りともいふべき金沢医科大学ならびに第四高等学校が自発的建物疎開を断行し、校舎の五割ないし七割を破壊」との記事を掲載している。昭和前期の金沢で「学都」の呼称が使用されていたことを確認できる資料である。[注20]

（続く）

注

（注1.）小林丈広・高木博志・三枝暁子『京都の歴史を歩く』。田中智子氏も、「学都」の呼称を「都市のアイデンティティ」として検討すべきであると提起され、「都市のナルシシズム」と捉えている。（高木博志編『近代日本の歴史都市　古都と城下町』所収「高等中学校制度と地方都市」　二〇一三）

（注2.）『まちと学が連携する新しい学都仙台をめざして　新学都像とその実現方策に関する研究』（仙台都市総合研究機構　二〇〇四）

（注3.）「「学都」金沢形成の端緒　第四高等中学校の誘致獲得を中心に」（『近代日本の地方都市　金沢・城下町から近代都市へ』　二〇〇六）、辻村明善氏も「旧制高校の所在地は「学都」として、日本の地方都市の形成に大きく貢献してきた」と述べている（『地方都市の風格　歴史社会学の試み』　二〇〇一）。

（注4.）『仙臺郷土研究　第十八巻第一号』（仙台郷土研究会　一九五八）

（注5.）和泉　浩　「「杜の都」としての仙台の歴史形成」（『東北都市学会研究年報　四号』二〇〇二）、「仙台の歴史的環境としての「杜の都」」（『仙台都市研究　二号』　二〇〇三）

武田篤志　「「杜の都・仙台」の成立場とその変容　場所イメージか

らの考察」（『東北都市学会研究年報　四号』　二〇〇二）、「三つの「森の都」と観光のまなざし　仙台・金沢・熊本」（『東北文化研究室紀要　四五集』東北大学文学研究科東北文化研究室　二〇〇四）、「「杜の都・仙台」の場所イメージ変容と流行歌―「ミス仙臺」から「青葉城恋唄」へ―」（『仙台都市研究　三号』東北都市学会　二〇〇四）

菊池慶子　「「杜の都・仙台」の誕生（『聖和学園短期大学紀要41』二〇〇六）、『「杜の都・仙台」の原風景　樹木を育てた城下町』（仙台江戸学叢書）（大崎八幡宮　二〇〇八）

（注6.）一戸富士雄　「戦争と宮城　地域社会と軍隊」（『足元からみる民俗12.調査報告集第㉒集』仙台市歴史民俗資料館　二〇〇四）

佐藤雅也　「地方都市の近代　軍都・学都と仙台」（新谷尚紀・岩本通弥編『都市と暮らしの民俗①都市とふるさと』　二〇〇六）

中武敏彦　「「軍都仙台」の呼び名はいつごろ生まれたのか」（『市史せんだい　第二五号』仙台市博物館　二〇一五）

（注7.）『市史せんだい　第三号』（仙台市博物館　一九九三）

（注8.）大村栄氏は、座談会前に「教育地としての仙台」と題して、『教育宮城　三〇五号』（宮城県教育委員会　一九八一）で早川智寛を紹介している。

（注9.）難波信雄　「学びの周縁からみた仙台」（「講座仙台学２００５―学都。その過去・現在・未来」報告　二〇〇五）

菊池慶子　「「学都」としての仙台」（「講座仙台学２００５―学都。その過去・現在・未来」報告　二〇〇五）

（注10.）一戸富士雄　「学都仙台の歴史とその実像　戦前期を中心に」（二〇一五）

菊池慶子　「「杜の都仙台」の歴史と現在」（二〇一五）

（注11.）『学都・仙台　明治の学生群像　東北大学がなかった頃』（東北大学学術資源研究公開センター資料館・第二高等学校尚志同窓会　二〇〇六）

（注12.）前掲、菊池慶子　「「杜の都仙台」の歴史と現在」

（注13.）前掲、中武敏彦　「「軍都仙台」の呼び名はいつごろ生まれたのか」

前掲、和泉　浩　「仙台の歴史的環境としての「杜の都」」

（注14.）前掲、菊池慶子　「「学都」としての仙台」

（注15.）前掲、中武敏彦　「「軍都仙台」の呼び名はいちごろ生まれたのか」

（注16.）前掲、一戸富士雄　「学都仙の歴史とその実像」

（注17.）斎藤広道氏のご教示による。

（注18.）前掲、『京都の歴史を歩く』

（注19.）この資料は、前掲、武田篤志「「杜の都・仙台」の場所イメージの変容と流行歌」によって知った。

（注20.）石川県立図書館のご教示による。